

公開講座「ESDレポートを読む会」報告

「地域で育てる・食農育で育てる川辺町の未来の担い手」

川辺町教育委員会学校教育指導監 山下 純生

「ESDレポートを読む会」について

「ESDレポートを読む会」では、鹿児島県内で実際に、持続可能な社会づくりに取り組んでおられる方を講師に招きました。そして、その報告いただく実践が、どのような学習活動や仕組みに支えられているのか等、参加者と議論を重ねることで、ESDの理解を深めることを目的とした講座です。

平成17年度は、表1に示すとおり、公開講座として4回開催しました。限られた紙面では、残念ながらすべてを紹介することができません。したがって今回は、山下純生さんに、川辺町におけるこれまでの食農育実践を整理していただくかたちでレポートをお願いしました。

食の生産基地を誇る鹿児島では、身近な地域資源である「食」と「農」を活用した食農育が盛んで、多くの実績がみられます。そのなかでも川辺町は、町を上げて食農育に取り組み、ユニークな支援体制を確立し、地域づくりとしても展開しています。

食農育とESDとの接点については、山下さんのレポートの最後に、川辺町を研究フィールドにしている教育学部修士1年生の岩田悠揮さんに論考してもらいました。

表1：鹿児島大学の公開講座として実施

| |
|---|
| 第3回 ESD レポートを読む会 6月9日 「鹿大のエコキャンパスの未来」 講師：小林隆生さん（鹿児島大学生協専務理事） |
| 第4回 ESD レポートを読む会 7月25日 「ゴミゼロを目指す川辺町の過去・現在・未来」 講師：亀甲俊博さん（川辺町企画商工課課長） |
| 第5回 ESD レポートを読む会 10月14日 「住民の手による町づくりと学習」 講師：室屋洋一さん（川辺町住民：IT会社社長） |

¹ ESDは、持続可能な開発のための教育の略称で、世界、日本、地域のESD動向を紹介するニュースレターがESDレポートです（NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）発行）。鹿児島の実践とESDを結ぶために、講座の度に最新号を配布し、情報の共有化に用いました。

第6回 ESD レポートを読む会 12月9日

「地域で育てる・食農育で育てる-川辺町の未来の担い手」
講師：山下純生さん（川辺町教育委員会学校教育指導監）
小栗有子さん（生涯学習教育研究センター）

はじめに

鹿児島県では、「豊かな自然環境や教育的伝統を生かした鹿児島らしい教育」の推進を図ることを重点目標に掲げ教育活動を推進している。この中で、特に郷土の自然や文化・歴史・産業を知ることにより、郷土への理解を深め、郷土への愛情や誇りを持ち、その良さを守り伝え、郷土の発展に主体的に貢献できる資質や能力の育成を図ることを目指している。

川辺町でも、平成14年度から、地域のすばらしい特性を生かしながら、農業の持つ教育力をフルに活用し子供たちに生きる力を培っていかうという趣旨で、町内すべての小中学校で、食農教育を進めている。

1 食農教育推進の背景

町内すべての学校で推進するための背景として、次の5つの点を共通認識した。

(1) 食生活の乱れ

- ① 一家団欒の食事が消えつつある。
- ② ハンバーガーやコンビニ弁当、スナック菓子等ファーストフードが増えてきている。
- ③ 朝食抜きの子や孤食が増えている。（町内でも2割近い子供が朝食抜き）
（朝食抜きで、脳の働きが、弱まり授業中の活力がない。）
- ④ アトピー性や精子減少症など新たな病気も出てきている。

(2) 食べ物・食材の変化

- ① 化学肥料や農薬等増加で、残存農薬等の影響がある。
- ② 防腐剤や合成着色料・化学調味料等の食品食材が増えてきている。
- ③ 海外からの農作物等が増えてきている。

(3) 日本食の良さの再考

- ① ご飯、みそ汁、納豆、豆腐、煮しめ、つけもの、のり等、日本食の良さを見直す。[町内給食での残食調査 残食の少ない給食 カタカナ文字 (ハンバーグ、シチュー…) 残食多い給食 日本食(納豆、味噌汁、あえもの等)]

(4) 食糧自給率が低い。

| | |
|-----------|------------|
| オーストラリア | 327% |
| カナダ | 184% |
| フランス | 136% |
| アメリカ | 127% |
| ドイツ | 100% |
| 日本 | 40% |

(5) 農業の持つ教育力を子供の生きる力に

簡単には出来ない作物を育てることで、そこから得られる工夫や知恵を生きる力の土台にする。

2 推進する上での共通理解

以上のことを踏まえて、教育の目標→知育+徳育+体育+食農育を教育の柱に、町内すべての学校で推進するために、町の「子供農業体験推進会議」を実施し、次の3つについて、支援団体等との共通理解を図っている。

(1) 農業体験を通して、すべての子供たちに、種まきから、施肥、除草、収穫して、調理加工そして食するところまでのあらゆる活動を体験させる。

17年7月に施行された、食育基本法にも次のように決められている。

第6条 (食に関する体験活動と食育推進活動の実践)
 食育は、広く国民が、家庭、学校、保育所、地域、その他、あらゆる機会とあらゆる場所を利用して、食料の生産から消費等に至るまでの食に関する様々な体験活動を行うと共に、自ら食育の推進のための活動を実践することにより、食に関する理解を深めることを旨として、行わなければならない。

内容については、具体的実践の中で紹介する。

(2) 農林課、農業委員会、農業改良普及センター、JA、農業インストラクター、各校区活性化委員長等話し合いを進め、それぞれの立場から支援をする。

本町では、年1回町の食農推進会議を開催し、子供たちの食農体験活動が、円滑に行われるよう、話し合いを進め

ている。また、学校によっては、独自で、校区食農推進会議を実施し、地域との連携を深めている。これらの会議を通して、子供たちの食農教育の啓発と活動支援を図っている。

その結果どの学校も農地の確保、人材の確保、農作機械の借用等スムーズな活動ができています。中学校では、町内の建設業者の組合が、ダンプ25台分の黒土を運び、校庭の旧バレーボールコート跡地に200平米の畑を作ってくださり、今年も、さつまいも、大豆、冬野菜等大収穫だった。

ちなみに平成18年2月22日(水)実施した町食農教育推進会議の出席者は、次の通りで、18年度に向けて活発な討議がなされた。

農業改良普及センター所長、JA川辺支所長、町農業委員会事務局長、同営農係長、役場農林課長、係長、農業委員代表、食農指導員(インストラクター)2名各校区村づくり委員長6名(いきいき大丸、休遊会、高田村づくり、せせらぎワールド、かじかスクール、神殿活性化委員会)、婦人加工部会長、8校の各学校教頭および担当者、教育委員会4名(教育長、学校教育課長、指導主事、担当者)

行政の支援としては、町で次の2つへの支援をしている。

① 各学校へは、農業体験活動費として、大規模校へは20万円ずつ(2校)他校へは、13万円ずつ補助をしている。(種子や肥料代、田畑やトラクター等の借り上げ代、収穫祭費用等)

② 各学校へ人材活用費として30000円ずつの予算配分(1人1時間1000円の30時間分)

③ 農業の専門の方を食農指導員として2名おねがいし、各学校での食農教育の指導に携わってもらっている。(1人1時間2000円の300時間 計600時間分の予算配分)

また各校区では、村づくり委員会や老友会、婦人加工部会等積極的に支援に携わってくださっているが、地域の声として、積極的に支援をしていきたいが「何を手伝えいいのか分からない。学校は、それを地域に教えてほしい」という大きな願いを持っている。

(3) すべての学校で、教育課程にきちっと位置づけて実施する。

各学校年度初めに、食農教育年間計画表を提出してもらい、それを元に、毎学期2名の食農指導員と各学校を巡回し、学年毎に、作業日程、作業内容等詳細を打ち合わせる

ようにしている。

3 食農で培われる能力

農業の持つ教育力を農業体験中央推進協議会等の資料から、次のようにとらえ、各学校での食農教育の推進を図っている。

■感じる：田んぼでの泥のぬるぬる感や、稲の重さ、牛や馬の鼓動や暖かさを感じ取り優しさをはぐくむことができる。子供たちは、作業をする中で、教える地域の方々の真剣さも感じ取っている。

■発見する：田畑を耕したりする中で、様々な生き物がいることに気付いたり、土づくりや、品種改良等人々のいろいろな工夫を発見する。

■知る：鍬やスコップ、鎌の上手な使い方を学んだり、昔のやり方を教えてもらったりして、先人の知恵や努力を知ることができる。

■考える：農作業の段階で、なぜこうするのか、なぜしてはいけないのかを考えたり自然と人との関わりの大切さについて考えることができる。

■作る：収穫した作物を使って納豆や豆腐、そばなどを作ったり、体験をもとに作文や観察日記、俳句を書いたりすることができる。

■食べる：植え付けから食するまでの過程に関心を持ったリ、作物や作った方々に感謝しながら食べ、「いただきます」「ごちそうさま」の意味を理解することができる。

■交わる：牛や豚など色々な生き物と交わったり、地域の方々、お年寄りの方々と交わったりすることができる。

これらの感動体験が、子供たちの生きる力につながってくるのではなかろうか。

このことをしっかり基本におきながら、各学校の取り組みを推進している。

以下、土づくりから食するまでの子供たちの具体的な活動の様子を紹介したい。

4 具体的活動

(1) 食農教育で一番すばらしいのは、子供たちの目の輝きだ。子供たちは、食農指導員の話真剣に聞いている。この中で、「米という字は、八十八と書くでしょう。それだけの仕事をして始めておいしい米が出来るんだよ。」等、働く人の知恵を学んでいる。学力向上の第一歩は、「目」と「耳」ですが、こういうところからもきちっと培われていくようだ。

【写真1】真剣な目で指導員の話聞いている



① 山から、落ち葉を拾ってきて、桑やトラクターで十分耕してから植え付ける。何よりも一番勉強になるのは、学校職員である。

【写真2】堆肥を運んで土づくり



② このように一本一本ていねいに植えたり水かけをすることによって、弱い者へのいたわりの心も生まれてくる。不登校やいじめ等の支援指導にも役立っていると思う。

【写真3】トマトの苗植え 種子から育てました。



① まず、土づくりが大切。子供たちは、牛糞堆肥をまきながら、牛糞の回りに集まっている小さな羽虫や、クモ・コオロギ等見ながら自然の営みを自ら発見している。

【写真4】1年生 牛糞の堆肥まき（先生たちも一生懸命、子供と一緒に汗を流しました。



お母さん方も初めての芋植え、苗もたてに突き刺して、食農指導員にやり直しをさせられていた。植える中で、「お芋の苗は、ナナメに植えるんだよ、そうすると、大きいおいもが、たくさんなるんだよ。」と説明を受け、きちっと植えていた。

このような作業の中で、鍬の使い方、苗の植え方等学び、また、なぜうねを作るのかそのわけ等昔からの農家の知恵を体験の中で身につけることが出来ている。

【写真5】1年生もやれば出来る。鍬を使って、うねづくり



② 除草から収穫

夏の頃になると、芋よりも雑草の勢いが強くなり、芋を覆い尽くすようになる。雑草が、大きくなる前に少しでもたくさん取っておこうと言うことで、夏休み前と休み中の2回の出校日に、雑草取りに精を出した。自分たちで植えた芋だけに暑さをもろともせず、一生懸命取っていた。

【写真6】暑さに負けず雑草抜き



③ いよいよ収穫

つるを取り除いてからの芋掘り、子供たちは、早く掘りたくて、うずうずしていた。

すべて、手掘りで行ったので、1つ掘るたびに、大きな歓声を上げているのが印象的であった。

【写真7】まず、芋のつるを刈り取って！



収穫した芋は、それぞれ持ち帰ったり、焼き芋、からいも餅等作ったり、バザーでの販売等に使っていた。

【写真8】大収穫「早く食べたいなー」



(4) 米の栽培

町内ほとんどの小学校が、それぞれの校区に経験者がたくさんおり、田んぼも学校の近くを借用できるため、米の栽培を行っている。

特に活動する中で、子供たちは、作業する上での多くの知恵を学んでいる。

【写真9】 雑菌が入らないようきれいな山土で苗床づくりからスタート



【写真10】 モミにまく薬作り



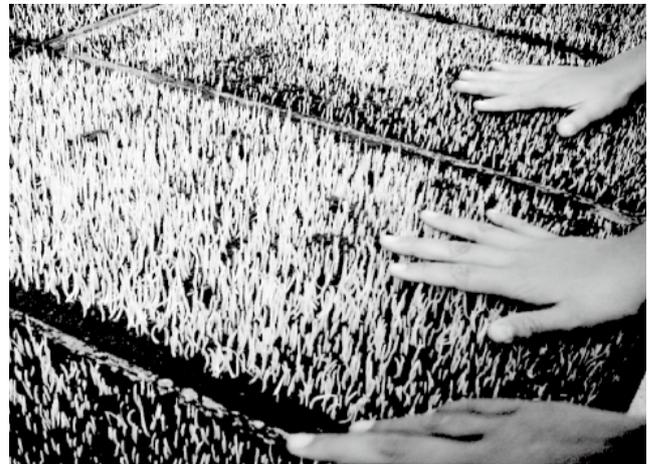
【写真11】 いよいよもみ撒き、色々な方法でのもみ撒き



【写真12】 芽が出てからも薬まき。真っ白とがった稲の穂にびっくりしていた。



【写真13】 子供たちが一番感動する場面！真っ白なちくちくする針のような芽をみんなさわっていた。



【写真14】 種まきまでの間にもたくさんの仕事があることを身をもって知ることができた。



【写真15】 子供の中には、始めて泥につかる子もあり、始めは、いやがっていた子も、すぐに慣れて、楽しく泥のぬるぬる感を味わっていた。すべて手作業で行い、昔の人たちの大変さも味わっていた。



【写真16】 鎌の使い方も知りました。



【写真17】 なぜうまにかけるとおいしいの？なぜ、ビニルをかけるの？子供たちも、疑問を次々投げかけていた。



(5) 中学校での活動

子供たちは、自分たちで育てた作物で調理加工を行います。各学校では、加工部会等に支援をもらいながら食べ物が出来るまでの過程を学んでいる。

ここでは中学生の豆腐づくりを紹介したい。

豆まきは、梅雨明けの7月中旬

大豆は、”大豆をまきに行く時、水くみの人と出会ったら引き返せというくらい水を嫌うということや芽が出やすいように自分で回転すること等自然の摂理について学ぶ。

【写真18】 一粒一粒ていねいに大豆播き



雑草取り

夏休み2回の出校日も草取り、特に3年生が率先して頑張りが、1,2年生も一緒に汗を流していた。

途中で、うねたても行ったが、なぜ、うねをたてるか、どのようにたてるかも、しっかり聞いて進めていた。

また、9月には、枝豆用として途中を間引きし、それぞれの家庭に持ち帰っていた。

【写真19】 泥と汗もさわやか



いよいよ収穫

殻の中のきれいな大豆を見てみんな感嘆の声を上げていた。

【写真 20】 はじめての大豆収穫



きな粉づくりも挑戦

生徒の中には、きな粉が大豆から出来ることを始めて知った子もいた。石臼を使って、楽しそうにきな粉づくりに取り組んでいた。この後、米の粉で団子を作り、きな粉をつけて、みんなでおいしそうにほおぼっていた。

【写真 21】 白の回し方も考えて!!



普段食べ慣れている豆腐だけに、真剣に取り組んでいた。温度の調節、にがりを入れるタイミング等、加工部会の方々に学びながら、進めていたが、にがりを入れて、固まる様子に驚いていた。

【写真 22】 加工部会の指導のもとで



豆腐の完成



やっとできあがりみんなで味わったが、中には持って帰ると喜んでいた生徒も。

【写真 23】

(6) 食べる・交わる

各学校自分たちの育てた作物を調理加工して、地域の方々と一緒に収穫祭を実施している。作る過程で、おばあちゃん方の声の中からも「こういうことがないと若い母ちゃんたちと語ることもないね」という声も聞かれる。若いお母さんも、こういった中で、お袋の味を学び楽しい会話も弾んでいる。

【写真 24】 地域の人と一緒に



① 田代小 はばたき収穫祭

そばにおにぎり、おもちに芋ケーキなどたくさん作りました。

【写真 25】親子みんなで、総掛かり



【写真 26】収穫祭すんで、お茶一服。おばあちゃん方も大満足！



② 神殿小野菜パーティー

あいさつもしっかり「私たちの作った料理です。おいしく食べてください。」13名の小さな学校だが、地域みんなの支えで、小規模校でも生き生きした態度が育っている。



【写真 28】一番身近な地産地消



③ 高田小 かがやきフェスタ

高田小では、6年前から、地域の村づくり委員会と共催で地域あげての収穫祭を実施している。

【写真 29】もちろん、田畑の貸し出し土づくり、種まきから、収穫調理まで、すべて村づくりの方々が、全面的に支援している。

地域みんなが、楽しみにしており、毎回500名近い方々が集まる。



【写真 30】地域の大きな交流の場に！！



【写真 31】 たちまち売り切れ



今まで

- 1 年生が、焼き芋や、芋料理
- 2 年生が、納豆や豚汁
- 3 年生が、豆腐やいも団子
- 4 年生が 大豆料理やふくれ菓子
- 5 年生は、例年そばづくり
- 6 年生は、餅つきやぜんざい作り

を3世代一緒に作り、楽しく交流を深めている。

【写真 32】 校庭には、農家の納屋においてある昔の農機具が並べられ、皆で実演。巨大な木製臼引き



【写真 33】 足ふみ縄網機



5 子供たちを地域で育てることの意味とこれからの推進策

(1) 各校区の村づくり委員会、校区活性化委員会等では、「地域づくり」＝「子供づくり」と位置づけ、各校区それぞれの委員会が、仕掛け役として、小学校まで出向き、一貫した食農教育を推進している。

また、土曜塾として「高田3世代塾」「いきいき大丸」「勝目休遊会」「せせらぎワールド」「カジカスクール」等地域、学校、家庭が連携した活動を組み、地域の農業者をはじめ、高齢者や、婦人部、青壮年部が先生役として活躍したり、農場や生産加工に必要な資材等地区から提供できるように整ってきている。

このことが、地域全体のコミュニティ形成になり、世代間交流や伝統芸能の復活、継承等地域資源を活用した、心豊かな村づくりに、つながっている。

(2) また、子供たちとしては、

- ① 食や農に従事する方々の姿に接したり、自らその仕事を体験することによって、農業の持つ大切さをよりいっそう理解することが出来る。
- ② 多くの人々との交わりを通して、コミュニケーション能力の育成が図られる。
- ③ 保護者や地域の方々が、学校のことにより多くの関心を寄せてくださるようになり、地域での子育ての気運がこれまで以上に高まってきている。
- ④ 地域の素晴らしい自然を活用することにより、作物の生長の不思議さ・たくましさ感動し、自然の厳しさ、農業の難しさ等について、体験活動を通して学び、自然を見つめる力が、培われてきている。

その結果、絵画、作文、俳句、日記等に、感性豊かな作品が見られるようになった。

特に農村地域等では、このように地域それぞれの環境を生かし、学校・地域が協力しながら支援していくことにより、子供たちに、生きる力を身につけると共に地域の活性化につなげていくことが出来るのではなかろうか。

6 成果と課題

昨年度から町の指定を受け食農教育の実践研究を進め、今年度研究公開を実施した、勝目小学校の成果と課題として次のような点を上げている。

(1) 児童の変容

■食べ物への見方考え方の変化や作物を大事に育てる姿など心の育成が図られた。

■観察力の高まりや俳句・絵の表現力の向上等の観察力・表現力の育成が図られた。

■今年2月の標準学力検査(CRT)の結果から全学年で、学力が向上した。

(町内すべての小学校で、全国平均を上回っている。)

■季節に伴う自然の変化への気づき(作物の生長・雑草・昆虫・気温・土等)が、敏感になった。

■自然(土のぬくもり、生き物の世界、種の不思議、災害の厳しさ等)のいとなみを体験を通して学ぶことが出来た。

■給食の時、「もったいない」という残食に対する意識が変化し、偏食が減少してきている。

■「1粒の種で、どのくらいの収穫があるか」「台風・長雨等の被害で、どの位損をするか等経済的観念が芽生えてきた。

■地域の人を始め多くの人々や友達との交流を通して、協力することの大切さや、感謝する心が育った。

■食農教育の体験活動が、子供の学校に来る楽しみの1つになっている。

(2) 教職員の変容

■植物の生長・収穫等を指導する中で、進んで取り組む子供の良さを発見でき、一人一人の子供をいかに動かし、伸ばしていけばよいかという、指導方法の改善・工夫に役立った。

■教育課程への位置づけが、しっかりなされることにより活動への意欲が増した。

■自ら汗を流し体を動かすことで、農業の難しさと楽しさを同時に味わうことが出来、児童への生きた指導が出来た。また、職員間のまとまりや地域保護者との関わりが強くなった。

■収穫した野菜を調理し、食することで、教職員の食べ物に対する安心安全が高まった。

■教師自身が、失敗を経験することで、指導内容に具体性が増した。

(3) 保護者の変容

■我が子との「こんなに野菜が生長したよ」「あんなふうには大豆や米は出来るんだね」等対話が増え、親子の健全な成長交流がよりいっそう図られるようになった。

■農作物の育て方や様々な調理法に接することにより、食農教育を見直し、親子で、農業の良さについて考える機会になった。

■学校へ来校する機会が増え、学校とのつながりが深くなった。

■作物の生育状況や、病害虫の状況など地域の様子をこまめに提供してくれるようになり学校との連携がいっそう深まった。

(4) 課題

■自主性・主体性を育む食農教育の推進・充実

■食農教育の評価のあり方、生かし方

■学年毎に取り組む内容の検討や見直し

■地域の活性化につながる食農教育のあり方

以上のような点が上げられているが、各学校においてもほぼ同じ点が出されている。これらの点を踏まえ、各学校がさらに充実した食農教育が推進できるよう努めていきたい。

川辺町の食農教育実践と ESD

教育学部修士 1 年 岩田悠揮

1. はじめに

本稿では、川辺町立高田小学校の食農教育の実践を中心に、食農教育と ESD がそれぞれどのようにつながっているのかを示し、食農教育が ESD にどのように役立っているのかを示したいと思います。

2. 食農教育と ESD のつながり

2.1 教育内容としてのつながり

食農教育で扱う「食」や「農」には環境・生命・健康・社会・経済・文化などさまざまなジャンルが深く関わっています。例えば、農薬による土壌汚染や水質汚濁、それに伴う人体への影響、生き物を食べるという食の本質、その生き物を育てるといふ農業、その農業を営む人々には独自の暮らしがあり、農業を営むということは生計を立てるといふことでもあります。

そのため、「食農」を教育内容として取り組むことは、それらのジャンルのことをつながりをもって学べる可能性を秘めているといえます。ESD はいろいろなジャンルを包括的にとらえることを重視していることから、食農教育が ESD の一つの形となりうるといえます。つまり、教育内容の面から見て、食農教育が ESD の一つの形となりうるということです。

2.2 教育方法としてのつながり

食農教育も ESD も地域を中心に取られます。

地域は自分の生きる現実空間であるため、現実の課題と出会える「場」といえます。そのために地域づくりとからめて食農教育や ESD を推進することは以下の 2 つの理由から有効だと考えられます。

① 生の学習だから

その「場」で課題に取り組む地域の持続的な発展を目指す地域づくりは、現実にある課題に対して試行錯誤して取り組むため、自分に引きつけてものごとを考えやすいものです。すると、そのものごとを深く認識することができ、行動することにもつながります。また、対象が身近なことなので直接的に行動することができます。

② 地域の教育力を活用できるから

地域にはさまざまな知恵やわざをもつ住民がいます。そ

の地域住民が教育に関わっていくことは学習者にとって大きな影響を与えうると考えられます。

食農教育と ESD に関連性を持たせることによって、さらにこれらに地域づくりの要素も加えることによって、ESD はよりよい学びになると考えられます。

3. 食農教育の成果

3.1 ESD の側面

食農教育によって、「ESD で身につけたい力や価値観」が、以下に挙げる成果をあげることができると考えられます。

[子どもにとって]

■農作物が食べものになることを認識する→生命観

(生命の有限性・不可逆性を認識し、生命を尊いと感じすることは、平和、環境、福祉などを大切にすることになります。)

■ものの流れがわかる (ex. 稲→体・わら→肥料・縄→土など→…) →循環思想

(ものの流れ、生命の流れがわかることで、自分たちの行動が平和、環境、福祉などにつながることを認識できます。)

■家事・労働に対する認識 (ex. 喜び・大変さ) を深める →労働観

(開発は労働した結果として現れるものです。そのため、何のために働くかを認識することは、開発と環境のバランスを考えることにつながります。)

■料理・農機具の技術を磨く→技術

(開発にも環境保全にも技術が必要です。料理・農機具の技術はその基礎になりえます。)

■科学技術の有用性が実感できる→科学観

(開発は科学の発達によって発展します。科学技術の有用性を実感することは、開発の重要性を現実的に見ることにつながります。)

■作物を育てたという自信がつく

→自己肯定観

(自信は次の行動の動力源となります。また、自分を認めることは、他者を受け容れる土台になり、それは自分や他者(生物含む)を大切にすることにつながります。)

[地域住民にとって]

■自分の技術や文化に誇りを持つことにつながる → 自己肯定観

(同上)

3.2 地域づくりの側面

子どもと地域住民の人間関係がよくなるのが地域づくりを進める上で大切になります。それについては、以下のような成果が考えられます。

[子どもにとって]

- 地域の人を見る目が変わる
- 地域の人との交流のきっかけになる

[地域住民にとって]

- 子どもと交流するきっかけになる
- 地域の人と交流するきっかけになる

4. おわりに

食農教育とESDの概念のつながりを考えた上で、川辺町立高田小学校の食農教育を事例として、ESDとしての成果を考察した。これによって、食農教育が生命観や循環思想、労働観などESDにとって重要なものが養われていることがわかる。また、この事例では地域づくりとも絡めて食農教育が進められており、このことがまた食農教育、ESDの成果を高めている。

ESDとしての成果を高めるために、食農教育の計画段階、実施段階、振り返り段階のそれぞれで、ESDとしての成果を意識した取り組みをおこなうことが望まれます。

研究の課題としては、川辺町の実践をさまざまな小学校を比較して、食農教育の計画段階、実施段階、振り返り段階のそれぞれでどのような工夫がなされているか、どのような経緯や形で地域づくりと結びついているかなどを検討することがあげられます。